

八 漢字漢文の訓讀

或る言語を他の言語に翻譯せんとする場合には、先づ前者の單語を後者の單語に翻譯し、次に前者の措辭法シキタツクスを後者の措辭法によつて排列しかへる方法を取るものが普通である。例へば英語 “I see a dog” なる文を國語に翻譯しようとする場合には、先づ “I” は「私」、「see」は「見る」、「a」は「一つ」、「dog」は「犬」なる單語に譯し、之を國語の措辭法に従つて「私は一匹の犬を見る」と排列しかへるのである。此の現象は支那語と國語、朝鮮語との間にも行はれる。即ち漢文を國語又は朝鮮語に翻譯する時には、先づ一箇一箇の漢字の意義を國語又は朝鮮語に言ひかへ、然る後國語又は朝鮮語の措辭法によつて之を排列するのである。斯の如く箇々の漢字を國語及び朝鮮語に翻譯し、又其の文を國語及び朝鮮語の措辭法に準據して排列することを訓讀クニドクといふのである。漢文を英、佛、獨語等に翻譯する場合にも、同じく訓讀と稱すること些かも妨ない譯ではあるが、從來の習慣上、漢語と國語又は朝

鮮語等との關係に限つて訓讀なる名稱を用ひるのである。それで茲では専ら國語及び朝鮮語に於ける漢字、漢文の訓讀法に就き一言を費さうと思ふ。

(一)單語の訓讀法 國語及び朝鮮語では、如何なる漢字に對しても略一定した訓を附して呼ぶ習慣になつて居る。即ち國語に就いていへば「天」の字を「ソラのテ」「地」を「ツチのチ」と稱呼し、朝鮮語では「하늘」の天、「땅」の地と稱呼するが如きこれである。然らば何故に吾人は一つ一つの漢字に對して訓を附する習慣を醸成せしめられたか。これには漢字の意義を國語に翻譯して讀むといふ重なる理由以外に、更にもう一つの原因あることを知らねばならぬ。

抑支那語の性質を考へて見るに、それは既に前にも述べた如く單音節語である。箇々の語は原則としてすべて單音節であるから、單音節なる條件の下に出来るだけ多くの音の結合を作らうとしても、非常な制限を受けることになる。其の結果支那語に於ては或る他の方法によつて語數の増加を計らねばならぬ。而して此の語數増加に對する究竟の方法は、つまりアクセント即ち四聲の力によつて見出されたのである。即ちななる單音節のかたまりに對して、平上去入の四聲(地方に

よつては八聲位まで有して居るものもある)の變化を加へると、一種の音のかたまりから、意義を異にせる四種の語を作りあげることが出来るやうになるのである。之を全體の單音節の數に配當すると、語數は非常な多數に達するのである。即ち支那語にありてはアクセント一つのはたらきによつて語數を増加することが出来るのである。

支那語に於てアクセントが如何に重大なる意義を有するかは、以上によつても明かであるが、國語及び朝鮮語等に於ける漢字音は支那語の音とは趣を異にし、餘程原音の性質を失つて居る。即ち韻書等に於ては形式上四聲の別は立派に立てられて居るが、實際の發音に於ては何等四聲を區別することなく、支那語に於て夫々アクセントを異にし、しかも重要な意義を有せる *ta : ta ta ta* の如き諸音は國語及び朝鮮語に於ては兩語一流の單一なる一箇の音調に變化せられてしまふのである。即ち國語及び朝鮮語に於ては同音異義の漢字(例へば國語で間、甘、感、寒、漢、看など)が非常に多くなるのである。此に於て國語及び朝鮮語等に於ては、何等かの方法によつて同音中の異義を區別する途を開拓せねばならぬこと

になつた。此の方法が即ち漢字訓讀發達の一方の動機となつたのである。

斯くの如くして訓讀なるものの發達し來つたことが分つたが國語及び朝鮮語に於ては其の發達の度合に於て自ら多少の相違が存して居る。即ち國語では必ずしも訓と音とを結びつけて漢字を唱へる習慣がないが、朝鮮語では訓と音とを必ず併唱する。例へば國語で「人」〔犬〕なる漢字を讀む場合には「人」は「ひと」といふ字「犬」は「いぬ」といふ字」と訓でこそいふが、更に進んで之を「ひとのじんの字」「いのけんの字」といふ風に唱へることをしない。然るに朝鮮語にありては「人」なる漢字を讀む場合には必ず「사람인」「犬」なる漢字を讀む場合には必ず「개전」と訓音併唱することを必要條件とするのである。所謂하늘, ㅏ의 流儀はこれである。斯の如く訓音併唱は朝鮮語特有の現象の如くにも思はれるが、十分な發達は遂げなかつたにしても、國語に於ても古くかゝる習慣が存して居たやうに思はれる。それは奈良、平安朝時代に於て、文選詩經、白氏文集、千字文、遊仙窟等の流行した時に、此等に一種の讀方が存して居た。例へば詩經でいふと

窈窕 トミヤビヤカナル淑女ノヨキヲトメハ君子ノマレビトノ好述ノヨキヲ

グヒナリ。

千字文でいふと、

天地ノアメツチハ玄黄トクロキナリ

の如く、音と訓とを交へて讀むのである。朝鮮語のは訓を先に音を後に、國語のは音を先に訓を後に、又朝鮮語のは一字一字に訓音を附し、國語のは二字以上の熟語等に對して一箇の訓のかたまりを附する点などに於て相違せる点はあるが、尙ほ精細に研究したならば、其の間に何等かの關係を見出し得るかも知れぬ。

(二) 漢文の訓讀法。前節は漢字一字一字の訓讀に關することを述べたのであるが、今度は漢字の結合たる文に就いて考へて見たい。朝鮮に於ける漢文の讀方は、先づ一つの纏まつた意義を有する語句のかたまりを字音で讀み、其の末部に吐を附して進み行くのである。例へば「德不孤」に於て「德不孤」なる句をすべて字音を以て讀み、其の下に「一」の吐を附し、又「必有隣」なる句を字音を以て讀み、其の下に「이」なる吐を附するのである。然るに漢文としてではなく、朝鮮文として其の意義を解釋する必要ある場合には、音訓相交へて「德은 외롭지 아니

漢文の訓讀法
漢文の訓讀法
漢文の訓讀法
漢文の訓讀法

한지타반다시이웃이잇나니라」の如く、全然朝鮮語の措辭法によつて讀下するのである。これが即ち所謂朝鮮語に於ける諺解なるものの體裁である。即ち朝鮮語に於ては漢文は先づ字音を以て讀み、必要ある場合には更に之を訓讀するといふことになるのである。然るに國語にありては些か之と趣を異にし、最初より音讀はなさず「德不孤必有隣」の如く訓点を附し、直ちに訓讀に移り行くのである。つまり國語の漢文訓讀法は朝鮮の諺解と其の軌を同じうするものである。これ兩者の間に存する漢文訓讀法の差異である。朝鮮人が漢文を音讀することは、條程漢文其のものの性質を忠實に受け傳へるといふ點に於て便宜を有して居るのであつて、朝鮮人が一般に内地人よりも漢文の知識に富んで居るのは、一つは此等が原因をなすものといはねばならぬ。

(三) 漢字で書いてあるものはすべて字音でよむ。朝鮮に於ては漢文は主義として音讀によることは既に前にも述べた通りであるが、漢字諺文交りの文にありても苟くも漢字で書かれてある部分は必ず字音を以て呼ぶのが常である。例へば祖先의祭를行한다は조선의제를행한다

彈力이極히強하故로 是 탄력이 극히 강하故로

の如く漢字は必ず字音を以て讀むのである。これが國語であるとすれば、必ず

祖先の祭を行ふ。彈力極めて強き故。

等の如く出來得るものは之を訓讀にする習慣がある。つまり國語にありては漢字假名交りの文に於ける漢字は、或る場合には字音を以て、或る場合には訓を以て讀むことになるのである。これ朝鮮人の國語學習に非常なる不便を感じる点である。總じて朝鮮人は漢字で書いたものはすべて字音を以て讀むといふ習慣を年來養はれ來つて居るやうである。それで外國の地名、人名、物名などの漢字で書き表はされたものは、其の漢字が如何なる外國語の宛字たるにもせよ、すべて朝鮮の字音に従つて之を讀む。例へば「獨逸」「華盛頓」「瓦斯」の如きは、國語にありては字音によらず、直ちに「ドイッ」「ワシントン」「ガス」の如く兎に角原語に近く發音するが、朝鮮語にありては、原語などはどうしてもあれ、唯假に借用せられた漢字其のもののみを根據として、徹底的に自分の字音に従つて「독일」「화성돈」「가스」の如く唱呼するので、朝鮮の外來語中には非常に原音に遠ざかつた發音を

なすものも少くない。要するに朝鮮人は常に漢字なるものに固い執着を持つて居ることを窺ひ知るに足るのである。